



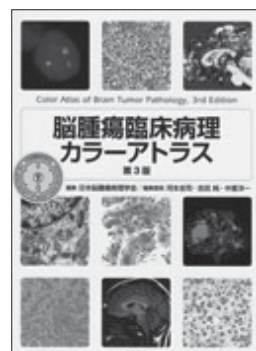
日本脳腫瘍病理学会●編

河本 圭司, 吉田 純, 中里 洋一●編集委員

『脳腫瘍臨床病理カラーアトラス 第3版』

書評者

嘉山 孝正 (山形大教授・脳神経外科学)



1988年に初版が発刊されて以来、脳腫瘍病理の解説書として瞬く間に若手の脳神経外科医、神経病理医の必携書になった『脳腫瘍臨床病理カラーアトラス』の第3版が、第2版以来10年ぶりに改訂された。本書は、神経病理、脳神経外科はもとより神経学、病理学に携わる多くの方から好評を得ているのは周知の通りである。その理由は、初版が発刊された目的にあるように、単に病理診断(組織学的特徴)のみならず、一つ一つの疾患におけるその組織学的特徴が、どのような病態、予後を辿るのかを体系立てて明らかとし、実際の治療に役立てんとすることに主眼を置いている、という他に類書がないためである。

どんな疾患を治療するにあたって、「相手を知る」ということが最も重要である。本書は、それぞれの脳腫瘍において、その組織学的分類から、

それぞれの腫瘍の本質、病因または病態生理と言い換えてもよいかもしれないが、これを明らかにしようとする意欲、つまるところ治療方針を決定することに役立つように考えられている。本書では、画像所見、組織所見(光学顕微鏡所見、電子顕微鏡所見)、予後などに加え、最近の分子生物学、遺伝子学分野の知見も網羅されており、疾患単位で、現時点でわかっているその生物学的特性を簡潔明瞭に理解することができる良書である。

また、組織所見の写真が非常に美しく、それぞれの組織型のまさしくスタンダードといえる所見がわかりやすく理解できることも、本書の特筆すべき点である。さまざまな診断技術が向上している現在においても、組織診断がその治療方針の決定にあたり、最重要であることは以前からまったく変わりが無い事実である。免疫染色、電

子顕微鏡所見と合わせ、診断基準が明確にされており、これから学ぼうとする若手医師はもとより、実際の治療を担当する医師すべてに必要な所見を学ぶことができる。さらに、エッセンスのごとき最新知見がちりばめられており、学問への興味をあらためてかき立てられるよう配慮されている。

初版の40項目から、第2版の78項目へ大幅に改訂され、この第3版では、2007年のWHO分類の改訂にあわせ、新しく加えられた項目をすべて網羅している。本書は、組織所見つまり組織学的分類からみたおのの疾患の理解を深め、臨床に役立ち、学問への探究心をくすぐる。神経疾患にかかわるすべての方に購読をお勧めしたい。

A4 頁216 2009年 医学書院刊
定価 19,950円(本体19,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00792-4]